

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考（原田）

【研究ノート】

シャーキャチョクデン著『了義を一つに 成就すべき論書の詳細な注釈』考

原田 覺

拙稿に於いては、論題に掲げた著作（著者『全集』本 Vol. 2, No. 2, foll. 1a1-75a2(coll. 471-619))の紹介と、その一部についての翻訳と検討を行う。同著者(A. D. 1428-1507)の著作を紹介研究の対象とする理由や方法、及び研究史その他については下記の拙稿の前書等を参照して頂きたい。

「シャーキャチョクデン著『如意[の]妙高[山]』和訳(Ⅰ)」『[国士館大学文学部]人文学会紀要』29号、pp. 172-157、同学会、東京、1996(平成8)年；「同(Ⅱ)」『国士館哲学』9号、pp. 96-113、国士館大学哲学会、東京、2005(平成17)年

同著作の第一葉第一面には表題のみを記載しており、その表題は『大なる乗り物の二つの規矩の詳しく解析すべきことを説示し了ってから了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈で御座います』*Śiñ rta chen poḥi srol gñis kyi rnam par dbye ba bśad nas rñes don gcig tu bsgrub paḥi bstan bcos kyi rgyas ḥgrel bshugs so*であり、著作中の主題提示では書名を *mThaḥ bral dBu ma chen poḥi tshul gñis rnam par phye nas rñes don gcig tu bsgrub pa rgya mtshoḥi sprin gyi ḥbrug sgra zab mo*(2a2)とし、奥書の冒頭では書名を *Nes don rgya mtshoḥi sprin gyi ḥbrug sgra shes bya baḥi*(4/5) *bstan ḥchos kyi rgyas ḥgrel bDud rtsiḥi char ḥbebs*(73b4-5)とし、或いは結頌Ⅰの冒頭に於いて『了義[たる]法の海からやって来た | 教言[と]正理[たる]雲[と]青[空]を享受する虚空に於いて | 善しく説示された甚深の雷鳴』*Nes don chos kyi*(73b7-74a1) *rgya mtsho las ḥoñs paḥi | luñ rigs sprin sñon rol paḥi nam mkhaḥ la | legs bśad ḥbrug sgra zab*

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考（原田）

mo[r]としている。一方で、同著者を異端視するゲルク派の学僧達は、1489年の著述である同著作を『二つの[考え]方の詳しい解析[の注釈]』*Lugs gñis rnam hbyed [kyi hgrei pa]*と呼び習わしている様である¹⁾。

I. 以下においては、最初に同著作の科文を提示することにより、内容の全体を概観することとしたい。尚、本誌はオフセット印刷による出版であり、チベット語のローマ字転写にパーリ語用のフォントであるVriROmanCを借用した為に、不足の活字がある。ローマ字に付した下線は下点を意味し、mに付した下線のみは上点を意味する。

表題(ga/kha, fol. 1a1(col. 471))

陀羅尼：南無仏陀也|(1b1(472))

帰敬偈(1b1~2a1(472~3))

主題提示：と供奉申し上げるように述べたり且つ| 著述するように立宗を[事]前に発し了ってから| 何であれ(1/2)説示されるべき法は| 『[二]辺を離れた大中観の二つの[やり]方²⁾を詳しく解析し了ってから了義を一つに成就すべきもの[たる]海の雲の甚深の雷鳴』と言われる論書がそれである| |これを説示するのに(2/3)三あつて|(2a1~3(473))

<1>一般[的]意義の門から意義の内容[を]構築[し]ること]khog phub | (2a3(473)/2a3~24a7(473~517))

<1 1>自己の考えを識別し[る]こと]ños bzuñ|(2a4(473)/2a4~3a3(473~5))

<1 1 1>必要な意義(2a4(473)/2a4~b6(473~4))

<1 1 2>総括した意義(2a4(473)/2b6~3a3(474~5))

<1 2>それを成就する[ように]為す(能成就[因の])sgrub byed [kyi]教言[と]正理を[詳細に]説示すべき[こと]| (2a4(473)/3a3~18a7(475~505))

<1 2 1>四宗義 grub mthah bshi[hi]の頂点と成った中観を識別し[る]こと]| (3a3(475)/3a4~4a6(475~7))

<1 2 1 1>四つの宗義[の]個々の見解を識別し[る]こと]| (3a4(475)/3a4~4a1(475~7))

<1 2 1 2>唯心(唯識)sems tsamのその見解は四宗義の頂点でないのであることの知る[ように]為すもの(理由)ses byed/その見解は唯心派(唯識派)Sems tsam paなどに無いと教示すべきこと(3a4(475)/4a1~6(477))

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考（原田）

<1 2 2>[その]類別 dbye ba を要点として教示すべき[こと] | (3a3 (475) / 4a6-7? (477?))

<1 2 3>個々の(3/4)宗義を識別し了ること/[第三 gñis/gsum pa[の項目たる]]個々の差別 khyad par (3a3~4 (475) / 4a7?~18a7 (477?~505))

<1 3>成立した意義[を教示し了ることにより末尾を総括すべきこと] (2a4 (473) / 18a7~24a7 (505~17))

<1 3 1>空性 stoñ pa ñid の解析すべきこと/空性の有名なもの miñ can (18a7 (505) / 18b1~19b4 (506~8))

<1 3 2>中[観と唯]心 dBu Sems の差別を典籍と結び付けるべき (18a7/b1) こと (18a7~b1 (505~6) / 19b4~24a7 (508~17))

<2>[個々の]典籍の[語]義[tshig] don を[詳細に]説示すべき[こと] | (2a3 (473) / 24b1~69a4 (518~607))

<2 1>論書の名前[と]意義 | (24b1 (518) / 24b1~27a6 (518~23))

<2 2>[それ/そのお名前]と具なる論書[[の]実際 |] (24b1 (518) / 27a6~68b7 (523~606))

<2 2 1>説示すべきことに入ること | (27a7 (523) / 27a7~29b6 (523~8))

<2 2 1 1>供奉するように詮説すべきこと (27a7 (523) / 27a7~29a4 (523~7))

<2 2 1 1 1>導師(釈迦) (27a7/b1) に対して中観を仰せになる方として賛嘆し了ってから敬礼を為すべきこと (27a7~b1 (523~4) / 27b1~28a1 (524~5))

<2 2 1 1 1 1>賛嘆 (27b1 (524) / 27b2~4 (524))

<2 2 1 1 1 2>礼 (1/2) 拝 (27b1~2 (524) / 27b4~28a1 (524~5))

<2 2 1 1 2>龍樹 Klu sgrub に対して中間の[法]輪の教示されるべきことと随順するように賛嘆し了ってから敬礼を為すべきこと (27b1 (524) / 28a1~7 (525))

<2 2 1 1 2 1>賛嘆 (28a1 (525) / 28a1~6 (525))

<2 2 1 1 2 2>礼拝 (28a1 (525) / 28a6~7 (525))

<2 2 1 1 3>無着 Thogs med に対して第三の[法]輪の教示されるべきことと随順するように賛嘆し了ってから敬礼を為すべきこと (27b1 (524) / 28a7~29a4 (525~7))

<2 2 1 1 3 1>[賛嘆] (28a7 (525) / 28a7~29a3 (525~7))

<2 2 1 1 3 2>[礼拝] (28a7 (525) / 29a3~4 (527))

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考（原田）

- <2 2 1 2>論書を著述する原因 (27a7 (523) / 29a4-7 (527))
- <2 2 1 3>[それによるならば] 著述するように立宗すること (27a7 (523) / 29a7~b6 (527~8))
- <2 2 2>説示すべきことそのものを記述すべきこと | (27a7 (523) / 29b6~64b7 (528~98))
- <2 2 2 1>本体をきちんと建立した[こと] | (29b6 (528) / 29b7~31b2 (528~32))
- <2 2 2 1 1>中観[たる] 正理聚 rigs tshogs の見解[と]行[と]結果 Ita spyod hbras[の]三が如何様であるのであるかの[やり]方 | (29b7 (528) / 30a1~3 (529))
- <2 2 2 1 2>後の弥勒[の]法 Byams chos phyi ma の見解[と]行[と]結果[の]三を如何様に説示するかの[考え]方 | (29b7 (528) / 30a3~6 (529))
- <2 2 2 1 3>中 (29b7/30a1) 観[たる] 讃頌聚 stod tshogs の見解[と]行[と]結果[の]三を識別し了ること (29b7~30a1 (528~9) / 30a6~31b2 (529~32))
- <2 2 2 2>支分を (6/7) 詳細に説示すべきこと | (29b6~7 (528) / 31b2~50a3 (532~69))
- <2 2 2 2 1>最初の規矩について二つの説示すべき[やり]方が生ずることの能成就[因]を配置すべきこと | (31b3 (532) / 31b3~32b3 (532~4))
- <2 2 2 2 2>第二の規矩についても二つの類似しない説示すべき[やり]方が有る[やり]方 | (31b3 (532) / 32b3~36a3 (534~41))
- <2 2 2 2 2 1>解析すべき基礎(全体) | (32b3 (534) / 32b3?~33b1 (534?~6))
- <2 2 2 2 2 2>解析すべき[面|/こと] (32b3 (534) / 33b1~3 (536))
- <2 2 2 2 2 3>それについて解析する因由 (32b3 (534) / 33b3~36a3 (536~41))
- <2 2 2 2 2 3 1>その解析すべきこととして建立する[ように]為す差別[の]實際 | (33b3 (536) / 33b4~6 (536))
- <2 2 2 2 2 3 2>二者を何の経から生ずるのであれ[その]根拠と結び付けるべき[こと] | (33b3 (536) / 33b6~34b1 (536~8))
- <2 2 2 2 2 3 3>この二者より超越する大中観を無着[の]足下がご承認なさらないと (3/4) 教示すべきこと (33b3~4 (536) / 34b1~36a3 (538~41))
- <2 2 2 2 2 3 3 1>唯識であるのであることにより大中観であることに

合理でないことを否定すべき[こと]| (34b1(538)/34b2~35a4(538~9))

<2 2 2 2 2 3 3 2>究境は三乗をご承認なさる因由によりそれであることに合理でないことを否定すべき[こと]| (34b1(538)/35a4~b5(539~40))

<2 2 2 2 2 3 3 3>阿羅(1/2)漢が大乘に入るならば究境は三乗が合理でないことの論争を捨離すべきであること(34b1~2(538)/35b5~36a3(540~1))

<2 2 2 2 3>両者の見解が中観として成立したものであること/瑜伽行 *rnal hbyor spyod pa* の究境の宗(3/4)義を中観として成就すること(31b3~4(532)/36a3~50a3(541~69))

<2 2 2 2 3 1>『最上要義[宝性[論]]』 *rGyud bla*(北京版 No. 5525~6)の見解と差別が無い因により成就する[こと]| (36a4(541)/36a4~43a3(541~55))

<2 2 2 2 3 1 1>『宝性[論]]』の(4/5)中観は瑜伽行の中観のみより超越していると教示すべき[こと]| (36a4~5(541)/36a4~37a4(541~3))

<2 2 2 2 3 1 2>その様であるならばまた見解に差別は無いと教示すべき[こと]| (36a5(541)/37a4~40b3(543~50))

<2 2 2 2 3 1 2 1>『宝性[論]]』に於ける見(4/5)解は他[者の実体による]空 *gshan ston* の正理により教示されるべき[やり]方| (37a4~5(543)/37a5~38b3(543~6))

<2 2 2 2 3 1 2 1 1>立宗を設定した[こと]| (37a5(543)/37a6~b6(543~4))

<2 2 2 2 3 1 2 1 2>能成就[因]を説示すべき[こと]| (37a5(543)/37b6~38a4(544~5))

<2 2 2 2 3 1 2 1 3>論争を捨離(5/6)すべきこと(37a5~6(543)/38a4~b3(545~6))

<2 2 2 2 3 1 2 2>その見解により[所]智障の[全ての]種子を捨離する[ことの出来る]能成就[因][を詳細に説示すべき[こと]]| (37a5(543)/38b3~40a5(546~9))

<2 2 2 2 3 1 2 2 1>無二の智は錯誤した二顕現の習気を捨離する[ように]為すものであるのである因由(3/4)により全ての[所]知障の対治であると教示すべき[こと]| (38b3~4(546)/38b4~39a2(546~7))

<2 2 2 2 3 1 2 2 2>諦[として]成立したものを承認したけれども諦[として]執着したものを捨離すべく為されるべきことに矛盾しない能成

就[因]を配置すべき[こと] | (38b4(546)/39a2~b2(547~8))

<2 2 2 2 3 1 2 2 3>等引| mñam gshag/bshag に於いて戲論を断ずるとき諦[として]成立したもの等の承認は何も無いのであるのだと教示すべきこと(38b4(546)/39b2~40a5(548~9))

<2 2 2 2 3 1 2 2 3 1>実際 dños dpa/pa | (39b2(548)/39b2~40a1(548~9))

<2 2 2 2 3 1 2 2 3 2>能成就[因][を配置すべきこと] (39b2(548)/40a1~5(549))

<2 2 2 2 3 1 2 3>それによるならば無着[の]足下の見解が中観であると成立したこと(37a5(543)/40a5~b3(549~50))

<2 2 2 2 3 1 3>三[法]輪の[尽所有の(あらゆる)]ji sñad pa/総ての[了義を『宝性』の論書が総括した[と教示すべきこと/[やり]方] (36a5(541)/40b3~43a3(550~5))

<2 2 2 2 3 1 3 1>その様に教示すべきこと[の]実際(40b3(550)/40b4~41a7(550~1))

<2 2 2 2 3 1 3 2>後のチベットの[考え]方を否定すべきこと | (40b3(550)/41a7~42a6(551~3))

<2 2 2 2 3 1 3 3>自己の[考え]方を建立したこと(40b3(550)/42a6~43a3(553~5))

<2 2 2 2 3 2>金剛乗の了義と差別が無い因により成就すること[hdi/|?]/[密]呪の教言から中観であると成就すること(36a4(541)/43a3~46a5(555~61))

<2 2 2 2 3 2 1>実際(43a3(555)/43a4~44a4(555~7))

<2 2 2 2 3 2 2>智が諦[として]無いと成就しようとしなければ諦[として](3/4)執着することを捨離し得ない[と言う]論争を捨離すべきであること(43a3~4(555)/44a4~46a5(557~61))

<2 2 2 2 3 3>[これ hdi/?この見解]が唯識に住するならば金剛の乗に於いて[も]甚だ[帰]謬すること(36a4(541)/46a5~50a3(561~9))

<2 2 2 2 3 3 1>間を結合すべきこと | (46a5(561)/46a5~b6(561~2))

<2 2 2 2 3 3 2>甚だ[帰]謬すること[の]実際 | (46a5(561)/46b6~48b4(562~6))

<2 2 2 2 3 3 2 1>教言に依存すべき甚だしい[帰]謬が[それを]回避する為に正量 tshad ma を発すること(46b6(562)/46b7~47a6(562~3))

- <2 2 2 2 3 3 2 2>自立[派]Rañ rgyud の因由を配置し了ってから[それが]必要である為に正量を生ずること(46b7(562)/47a6~48a6(563~5))
- <2 2 2 2 3 3 2 3>それによるならば瑜伽行の修習が生起した見解は錯誤していないと成立したこと(46b7(562)/48a6~b4(565~6))
- <2 2 2 2 3 3 3>[それに対する疑惑/論争]を捨離すべきこと(46a5(561)/48b4~50a3(566~9))
- <2 2 2 2 3 3 3 1>[密]呪[の考え]方に於いて生起次第の加行 shon hgro[hi]の見解より超越した空性 ston ñid の見解が有る[と言う]論争を捨離する[こと]|(48b4(566)/48b5~49a2(566~7))
- <2 2 2 2 3 3 3 2>円成[実性]yoñs grub は実体により空 no bos ston pa であることが決定しなかったならばそれに対して相[を]執着すること mtshan hdzin を(4/5)排除できない[と言う]論争を捨離する[こと](48b4~5(566)/49a2~50a3(567~9))
- <2 2 2 2 3 3 3 2 1>敵者(欠(欠)/49a2~5(567))
- <2 2 2 2 3 3 3 2 2>その返答に於いて(5/6)甚だ[帰]謬することを配置すべきこと(欠(欠)/49a5~7(567))
- <2 2 2 2 3 3 3 2 3>第三[の項目たる](49a7/b1)その様に[帰]謬することに付いて同意するならば| 排除すべきことを教示する[やり]方(欠(欠)/49a7~50a3(567~9))
- <2 2 2 3>それによるならば[第三/最後]の[法]輪が了[の]義[を持つもの]として成立したこと(29b7(528)/50a4~64b7(569~98))
- <2 2 2 3 1>弥勒[の]法は始終の実践の見解を識別する[やり]方から成立したこと(50a4(569)/50a5~52b7(569~74))
- <2 2 2 3 1 1>両方の典籍の自己[の]本質 rañ rkañ を如何なる宗義であると説示すべきかにより要略として教示すべき[こと]|(50a5(569)/50a6~b3(569~70))
- <2 2 2 3 1 2>無着兄弟が中観であると注釈した[やり]方により説示すべき[こと]|(50a5(569)/50b3~52b5(570~4))
- <2 2 2 3 1 2 1>無着[の]足下が説示した[やり]方(50b3(570)/50b3~51b2(570~2))
- <2 2 2 3 1 2 2>それそのものを世親 dByig gñen がまた注釈した[やり]方(50b3(570)/51b2~52b5(572~4))
- <2 2 2 3 1 3>聖[解脱軍]と獅[子賢]hPhags Sen の説示[する/したこ

とにより〕(5/6)〔やり〕方はここで主要でないのだけれども意義の門から〕末尾 *hjug/mjug* を総括すべきこと (50a5~6(569)/52b5~7(574))

<2 2 2 3 2>龍樹[の]足下の後の典籍の実践の見解の識別する[やり]方からそこに成立したこと/龍樹[の]足下の了義を識(52b7/53a1)別することを思惟し了ってから| 最後の教誨 *bkaḥ tha ma[hi]*の見解を中観であると成就すること (50a4(569)/52b7~59a2(574~87))

<2 2 2 3 2 1>一般に龍樹の正規のお考え等が不同であると説示すべき[やり]方| (53a1(575)/53a2~56a3(575~81))

<2 2 2 3 2 2>その[考え]方に於いて或る了義を識別する時最後の[法]輪と一致すること| (53a1(575)/56a3~57a5(581~3))

<2 2 2 3 2 2 1>龍樹[の]足下が最初[と]二[番目の法]輪に於いて見解を決定する[考え]方が如何様であるかと (3/4)説示する[やり]方| (56a3~4(581)/56a4~b6(581~2))

<2 2 2 3 2 2 2>最後の[法]輪の了義を修習することにより体験されるべきこと(体験対象) *ñams su myoñ bya [ñid]*そのものとして如何様であるかと説示すべきこと (56a4(581)/56b6~57a5(582~3))

<2 2 2 3 2 3>その様であるならば(1/2)また正理聚と矛盾しない[やり]方を詳細に説示すべきこと (53a1~2(575)/57a5~59a2(583~7))

<2 2 2 3 2 3 1>実際(57a6(583)/57a6~b4(583~4))

<2 2 2 3 2 3 2>それにより成立した意義(57a6(583)/57b4~58a4(584~5))

<2 2 2 3 2 3 3>[その意義そのものを経典[と密]呪[の]両者の]教言と結び付けるべきこと (57a6(583)/58a4~59a2(585~7))

<2 2 2 3 3>最後の[法]輪(4/5)の解析すべきものを三つに解析し了ってから三者の見解は中観であると成立したこと (50a4~5(569)/59a2~64b7(587~98))

<2 2 3>説示すべきことが究境に到った[こと/所作] (27a7(523)/64b7~68b7(598~606))

<2 2 3 1>自己の[宗]派(64b7/65a1)に対して賛嘆すべきこと (64b7~65a1(598~9)/65a1~5(599))

<2 2 3 2>敵者に対して譴責すべきこと (65a1(599)/65a5~68a7(599~605))

<2 2 3 3>謙虚になり了って典籍を著作するべき *rtsam/brtsam pa* 必要

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考（原田）

を詮説すべきこと (65a1 (599)/68a7~b7 (605-6))

＜2 3＞[他の典籍で錯誤を捨離すべき目的で]著述する者の名前を[教示すべきこと/述べるべきこと] (24b1 (518)/68b7~69a4 (606-7))

＜3＞第三[法]輪の了義に恭敬を生じ[了ってから/たことにより]末尾を総括すべきこと (2a3 (473)/69a4~73a4 (607-15))

＜3 1＞正量を具える論書に生起した[やり]方 | (69a4 (607)/69a5~70b4 (607-10))

＜3 1 1＞弥勒の典籍から如何様に生起したか[と云うこと] (69a5 (607)/69a6~b2 (607-8))

＜3 1 2＞龍樹の典籍から如何様に生起するか[と云うこと] (69a5 (607)/69b2~5 (608))

＜3 1 3＞聖[なる]提婆の典籍から如何様に生起するか[と云うこと] (69a5~6 (607)/69b5~70b4 (608-10))

＜3 2＞それ (4/5) そのものが印度[と]チベット[の]学者の教授の典籍などからも生起すること | (69a4~5 (607)/70b4~71a4 (610-1))

＜3 3＞自己が何の後に随順するか[の]相承の]根拠を[誤りなく]教示すべきこと (69a5 (607)/71a4~73a4 (611-5))

回向偈 (73a4~b4 (615-6))

奥書：と[回向する]『了義[たる]海の雲の雷鳴と言う (4/5) 論書の詳細な注釈[たる]甘露の降雨者(帝釈天)』と言うこれは | 沢山に聴聞なさった方[で]海の中央におわし且つ | 父系[と]母系の吉祥により最も高貴な妙高山[たる] | ケルサン=チュキギヤムツォイデ sKaI bzañ Chos kyi rgya (5/6) mtsho^{hi} sde[s]が | 遠距離から親しく沁み込むお言葉により勧請し了る面で為し了りましてから(勧請しましたので) | ウ地方 yul dBus の読誦者[たる]吉祥[なる]シャーキャチョクデン Śākya mchog ldan | ディメレクパイロ Dri med legs pa^{hi} blo[s]が | ツァン[たる]右翼 rTsañ g-Yas ru の土地の明点[たる] (6/7) セルドクチェン gSer mdog can と言う法の広大な[寺]院の中央[たる] | ガーデンチャンパ dGa^h ldan Byam pa の寺廟で親しく組み合わせた(著述した)[その]筆受者はロサン=チュキゲルツェン Blo bzañ Chos kyi rgyal mtshan なのである || || (73b4~7 (616))

結頌 I (73b7~74b4 (616-8))

陀羅尼：mañga lam | | bha vantu | | (74b4 (618))

結頌Ⅱ (74b4~75a2 (618~9))

Ⅱ． 同資料の全体の現代語訳を示す紙幅はないけれど、残余の紙幅の範囲で本文を翻訳し、それに対して簡単な検討を加えたい。但し検討を加える範囲は、チベット人学僧に特有な極端に婉曲な表現に対して少しでも文脈を明確にする範囲に止めたい。

<1 1 1>最初[の項目] (2a4/5) は | 有雪の国土(チベット国) Gañs can gyi ljongs に於いて昔おいでになった或る偉大な方々と | 後[に]おいでになった方[たる]大部分の方々は | これ[たる]話として(所謂) | 「教誨[たる]最後の[法]輪(第三法輪)を善ろしく詳細に解析し了ったもの(経)と | 勝義が完全に (2a5/b1) 確定した[法輪(第三法輪)]と[言うことを]お名前として献呈したもの(経)[との]それ等の内から或る精髓の経など以外[の]大多数[の経]等と | そのお考えを注釈する論書に於いても | 尊者[たる]弥勒の三種の典籍と | 無着[の]足下の典籍等から (1/2) 『宝性[論頌]』の注釈のみ以外[の]大多数[の典籍]等と | 世親[の]足下が大乗のお考えを注釈して組み合わせたもの(著述した典籍)[との] | それ[等]一切の了義[たる]究境のもの mthar thug pa は宗義を述べる四[者]の中の唯心派と言われるそこに住し且つ | それはまた事物であると述べる者 dños (2/3) por smra ba そのもの[である]が故にそれから説示した見解の次第が或る程度 ji tsam shig 習熟される goms pa [r] ように為されたけれど | 一切智者に向かう[十]地[と五]道の次第は一体何をか言わんや[であり] | 小乗の菩提に行く道の完全な智のみがまた有るのでないのだ | | (3/4) と述べるそれ等は酷くも[帰]謬し大いに[であり]且つ | 完全に適合しないものそのものとして見えることと | その述べたこと[と]に付いては | 如何[であれ]話として(所謂) | 「何故にであれ勝[者]より大いなる学[者]は誰もこの世間に有るのでなくて | | 」ということから | 「誰であれ意は法に対して嫌悪するその人 (4/5) に[解脱]は何処に有ろうか | | 」と言う間が教示したその大きな過失と成るので疑ってから | その過失の道に自分自身が入らないことと | 自分と縁分が等しい(同類の)或る人をまた本当に悲惨なその大いなる深淵から救護すべきこと[と]の為 (5/6) にこの偈品を組み合わせたのであるのだ | |

最初に著者は自己の見解が「昔」から著者の時代に到るまでのチベットの「大部分の」学僧達の見解と異なっていることを表明している。即ち「大部分の」学僧達は自己の見解として第一に「或る精髓の経など」を除外した第三法輪に属する「大多数」の經典と、第二に論書としては「弥勒の三種の典籍」である、前伝期(吐蕃時代)にチベット語訳が成立した『莊嚴經論頌』『弁中辺論頌』『現觀莊嚴論頌』と、そして『宝性論(頌)』の注釈「以外」の「無着」の諸著作と、そして「大乘のお考えを注釈した」世親の諸著作と等の經典と論書が主張する「了義[たる]究境のもの」は唯識派たる「事物であると述べる者」の主張であり、その「見解の次第」に「或る程度習熟」する様に努めたけれど、結局は「[十]地[と五]道の次第」である第三法輪と「小乗の菩提に行く道」である第一法輪とを捨てて、中觀を説く第二法輪を選択したとする。これに対して著者は、その見解は「[帰]謬」しており「完全に適合しないもの」であるとした上で、その論拠として「勝[者]」と「法に対して嫌悪するその人」との「間が教示した」ことに対して「大きな過失」があるとする。『如意[の]妙高[山]』には「仏陀から有情の間に遍満する自性[が] (2/3) 清浄[である]智慧[であって]」自性の光明それそのものが善逝の蔵である(16b2~3)」とあるので、この「大きな過失」が「善逝の蔵」即ち如来蔵を証悟しないことであると推定できる(前書の拙稿Ⅱ参照)。更に著者は「その過失の道に自分自身が入らないこと」と「自分と縁分が等しい」人々を「救護」することとの為に「この偈品」即ち当該著作を著述すると、著作の意図を表明している。また著者にとって「事物であると述べる者」とは唯識派を指すことが明らかであるけれど、唯識派のみを指すかどうかは多少の検討の余地を残す。

<1 1 2>第二[の項目たる]総括した意義は| 無着[の]足下の乗り物の規矩(車轍)から生起した了義の精髓[たる]究境のものは| 全ての乗の頂点から説示した全種類の最高と具なる rnam pa kun gyi mchog dañ idan pa[hī] 空性以外の部分(6/7)で説示し得ない理由により| 唯心より以前に聖者の道そのものとして成就すべきことと為されることと| また他の者達が「実体性はないと述べる no bo ñid med par smra ba[hī] 典籍から住する[考え]方(実質) gnas lugs として説示した空性は| 蘊を完全に断じ(否認し)た rnam(2b7/3a1) bcad [kyi] 空性と言う芭蕉の

如くに精髓(芯)が無いそれだけのものであるのだけれど | それ以外 [に] 瑜伽師 rnal hbyor pa[hi] の智が(による)体験すべく為されるべき (体験対象[の]) ñams su myoñ bar bya ba[hi] その空性はそれ等として 教示されなかったので一切智者の道と成らない(1/2)のである | |」と述べるそれをまた否定する為に讃頌の聚 bstod pañi tshogs の教言を正量と為し了ってから | 「実体性は無いと述べる典籍でも | 法の界の[体性]智(法界体性智) chos kyi dbyiñs kyi ye ses そのものを瑜伽師の現前 [識] mñon gum の体験対象に成った了の義そのものとして成就(2/3)すべく為されるべきであるのだ | |」ということ[とでそれ]はこの偈品の総括した意義なのである | |

続いて結論を先取りする「総括した意義」として、第一に「無着」の「了義の精髓[たる]究境のもの」は「空性」を前提とするとし、その「理由」によって「空性」は「唯心より以前に聖者の道そのものとして成就すべき」であり、第二に法界体性智「そのものを瑜伽師の現前[識]の体験対象に成った了の義そのものとして成就すべき」であるとする。第二については「他の者達」は「実体性は無いと述べる典籍」が「説示した空性は」「蘊を完全に断じた空性」であって「瑜伽師の智」による体験対象としての「空性」は「教示されなかったので一切智者の道と成らない」と主張するけれど、その見解を「否定する為に讃頌の聚の教言を正量と」した上で、同じ「実体性は無いと述べる典籍」が上記第二の見解を示しているとする。

<1 2 1 1> 【第 1 段落】最初[の項目]に於いて | 分別と述べる者(毘婆沙師) Bye brag tu smra ba は | 近取[因] ñer len の蘊は補特(3a4/5) 伽羅(人) gañ zag により空であることと | 外[と]内の法は粗大[で]そして[心]相続の実体として成立しなかったものそのもの[である]として正理が決定した | その正理[と心]相続が習熟されるように為されるべき知覚(心) blo[s]が発した相 mtshan ma を何としても把握しない般若[と]はこの法の者達の見解として承認するのである | | (5/6) 等引と随順して後[に]得る(后得の)宗義は | 対象が顕現する知によって外側の対象は赤裸々 rjen char/cher に直接に証悟されるもの rig pa[で]そして | 三時は実事 rdzas として成立したもの[で]そして | 三つの無為は常住の事物であると承認すること等なのである | |

以下では「四つの宗義」の「個々の見解」を同一の視点から比較して「識別」している。「最初」は毘婆沙師であり等引の前の見解として、第一に「近取[因]の蘊は補特伽羅により空であること」を、第二に「外[と]内の法は粗大」であり「[心]相続の実体として成立しなかったもの」であることを「正理」によって「決定し」た上で「その正理[と心]相続が習熟されるように為されるべき知覚が発した相を何としても把握しない般若」を「承認する」とする。また「等引」の後得の「宗義は」「対象が顕現する知によって外側の対象は赤裸々に直接に証悟されるもの」であることと「三時は実事として成立したもの」であることと「三つの無為は常住の事物である」ことと「等」を「承認すること」であるとする。この「三つの無為」とは択滅と非択滅と虚空を指すと考える。

【第2段落】経部派(経量部) mDo(6/7) sde pa は | 前の等引の見解それを基礎に設定した上で steṅs/steṅ su | 法に付いて自[相と]共[相の]二に解析し了ってから | 共相 spyi mtshan[の]一切は自己の実体によって空であると決定し了って | その[心]相続が住するように為す知覚が発した相を何としても(3a7/b1)把握しない般若は見解[であり]そして | それが導き出した後[に]得る宗義は | 対象が顕現する知によって外側の対象は証悟されず且つ | その行相(形相)そのもの rnam pa ṅid が証悟されることに於いてそれが証悟されると施設したことと | 了義[たる]勝義の諦に於いて自相 raṅ mtshan によって(1/2)遍充されること[と]等なのである | |

第二は経量部であり「等引の」前の「見解」として、毘婆沙師の「等引の見解」「を基礎に設定した上で」「法」を「自[相と]共[相の]二に」分類した内の「共相[の]」一切は自己の実体によって空であると決定し「その[心]相続が住するように為す知覚が発した相を何としても把握しない般若は」経量部の「見解」であるとする。また「等引」の後得の「宗義は」「対象が顕現する知によって外側の対象は証悟され」ず「その行相そのものが証悟されることに於いて」「対象が」「証悟されると施設したこと」と「対象が」「了義[たる]勝義の諦に於いて自相によって遍充されること」と「等」であるとする。

【第3段落】その[考え]方[たる]両者に於いて所捨 *spañ bya* [hi] の要点[たる]無明は | 具煩惱の[無知]と | そうでないのである無知なのである | | 最初は補特伽羅の我に迷うこと[で]そして | 第二は | 粗大[と心]相続と性質 *ldog pa* [と]他[を]除[外すること] *gshan* (2/3) *sel* として説示したこと等は自己の実体によって成立したと迷うことなのである | |

毘婆沙師と經量部の「所捨の要点[たる]無明は」共通しており、第一に「補特伽羅の我に迷う」「具煩惱の[無知]」であり「第二」に「粗大[と心]相続と性質[と]他[を]除[外すること]」「等は自己の実体によって成立したと迷う」「具煩惱」「でないのである無知」であるとする。

【第4段落】第三[たる]唯心派の等引の見解は | 有分別 *rtog bcas* [と] 無分別 *rtog med* の知に於いてそこに顕現するだけ以外の対象は何も無いと聞[学と]思[量] *thos bsam* が決 (3/4) 定し了ってから | その様に通達される *rtogs pa* [hi 心] 相続が習熟されるように為す知覚が発した相を何としても把握しない般若は崩壊したのである *shig go* (証空者なのである *shig po ho*?) | | それが導き出した後[に]得る宗義は | 外側の対象と共相として説示したこと[と]等は遍計[所執性で] *kun btags* (4/5) そして | 自己の実体によって空なのである | | 習気によってそこに顕現するものは依他[起性] *gshan dbaṅ* [で]そして諦[として]成立し[たもの]なのである | | 否定[すべき]基礎[たる]その依他[起性]が否定されるべきもの[たる]遍計[所執性]により空である空性は円成[実性で]そして | それによるならば勝義の諦なのである | |

「第三」は唯識派であり「等引の見解」として「有分別[と]無分別の知に」「顕現する」「以外の対象は何も無いと」「聞[学と]思[量]が決定し」て「その様に通達される[心]相続が習熟されるように為す知覚が発した相を何としても把握しない般若は崩壊した(証空者なのである?)」とする。また等引の後得の「宗義」として「外側の対象と共相として説示したこと[と]等は遍計[所執性]」であり「自己の実体によって空」であり、また「習気によって」心[に]顕現するものは依他[起性]」であり「諦[として]成立し[た

もの]」であり、一方で「依他[起性]が」「遍計[所執性]により空である」と言う意味での「空性は円成[実性]」であり「勝義の諦」であるとする。

【第5段落】その様に毘[婆沙師と]経[部派の]Bye mDo(5/6)二の見解は三乗の内から声聞の乗の者達の見解が相当するもの go chod po[で]そして| 唯心のこの見解は独覚の乗の者達の見解が相当するものそのもの[である]と説示された如くに承認出来ることなのであって| 「何故ならば」夫々の見解などの意義に付いて等(6/7)引することの無間断道(無間道)が煩惱と所知の障碍を把握[すべく]分別すると[言う]のが二の乗の道の所捨であると説示されたそれ等の種子[の]根本を抜取り得ると説示したが故になのである| |

以上を纏めて、毘婆沙師と経量部の「見解は」「声聞の乗の」「見解」であり、唯識派の「見解は独覚の乗の」「見解」であるとし、その論拠は「二の乗の道の所捨」は共通しており、その論拠として「夫々の見解などの意義に付いて等引する」無間道によって「煩惱と所知の障碍」の「種子[の]根本を抜取り得ると説示した」からとしている。

【第6段落】第四[たる]中観の見解は| 能取は自己の実体により空 rañ gi ño bos(3b7/4a1) stoñ pa[r]であると決定し了ってから習熟されるように為された知覚が発した相を何としても把握しない般若なのである| |

「第四」は「中観」派であり、その「見解」として「能取は自己の実体により空であると決定し」「習熟されるように為された知覚が発した相を何としても把握しない般若」であるとする。等引の后得の宗義に閑説することもなく、詳細な議論をしないのは、以下の本文が正にこの「中観」派の見解を主題としているからであろう。また以上の四種の宗義を通読して明らかなのは、等引までの「見解」として「知覚」を規定する表現に差異がある様に見受けるけれど、小乗仏教と大乘仏教を総合した顕教一般に共通する「見解」として「知覚が発した相を何としても把握しない般若」を著者は重要視していることである。

<1 2 1 2>【第 1 段落】第二[の項目たる]その見解は唯心派などに無いと教示すべきことは| その見解は声聞の者は一体[何と]設定するまでもなく| |唯心と述(1/2)べる大乘の者達に於いても有るのでないのであって| [何故ならば]『入楞伽[経]』*Lañ kar gśegs pa*(北京版 No. 775)から| 「正しい所縁に依存し了ってから| |唯心からも出離するように為されるべし| |」と[言い]そして| 『経部莊嚴[論]』*mDo sde rgyan*(北京版 No. 5521, 5527, 5530~1)から| 「そこに顕現する唯心に於いてマア正しく住し| |それから心(2/3)も無いものそのものと通達すべし| |」と[言い]そして| 『中辺[分別論]』*dBus mthah*(北京版 No. 5522, 5528, 5534)から| 「無所縁に依存し了ってから[そこ]に| |無所縁は完全に生ずるべし| |」と[言い]そして| 『明[句]義[論]』*Don gsa*(北京版 No. 5260?)³⁾からも| 「能取の行相の性相 *mtshan ñid* が詳しく証悟されることのみそれをも排除すべきであって| |」と[言い](3/4)唯心と能取は諦[として]無い見解に上下の差別を明らかに仰せになり了り且つ| 唯心の見解の上には中観の見解がい波羅蜜多の乗の者達[である]と説示しないが故になのである| |

「その見解」とは直前にある前科段の第 6 段落の「中観の見解」であり、それは小乗仏教と大乘仏教の唯識派とには無いとする。その論拠として四種の経/教言を引用した上で「唯心と能取は諦[として]無い見解に上下の差別」があるとし、唯識派の「見解の上には中観の見解」のみが大乘仏教としてあるだけであるからとする。

【第 2 段落】若しも弥勒[の]後の法[で]随うもの(4/5)と具なるものから現われる能取を諦[として]無いと説示したそのことによって法の無我の相当すること *go chod pa* でないのだ[と]思うならば相当しないこと *go mi chod pa* でないのであって| [何故ならば]能取と言う言葉は所取として顕現し且つそれは能取の知覚そのものに対して説示したのであるのだけれど無二の智(5/6)に於ける能取の言説は經典から現われないが故になのである| |

「弥勒[の]後の法」とは『宝性論頌』と『法法性分別論頌』を指し(前書の拙稿Ⅱ参照)、この二著と関連仏典とが「能取を諦[として]無いと説示

した」ことは「法の無我」を「説示した」ことに「相当しない」と言う反論に対して、著者は「相当する」と回答し、その論拠として「能取と言う言葉は所取として顕現」と同時に「能取の知覚そのもの」である一方で「無二の智に於ける能取」と言う「言説は」如何なる「經典」にも無いからであるとする。ここでの「無二の智」とは「能取」と「所取」が「無」い「智」であろう。

<1 2 2>第二[の項目たる]類別を要点として教示すべきことに於いて
| 中観派 dBu ma pa は二であって | 瑜伽行の中観派と | 実体性は無いと述べる中観派[と]なのである | |最初に於いて自[己の実体により]空である rañ stoñ と述べるものと | 他[者の実体により]空である gshan(6/7) stoñ と述べるもの[とがある]のである | |その実体性は無い[と述べる]派に於いても | 二であって | 帰謬派 Thal hgyur ba と | 自立派 Rañ rgyud pa[と]なのである | |それ(自立派)に於いても二であって | 分位 gnas skabs を経部派の如くに承認する者と | 唯心派の如くに承認する者[と]なのである | |

「中観派」の区分であり、最初に「瑜伽行の中観派」と「実体性は無いと述べる中観派」に二分し、前者を「自[己の実体により]空であると述べるもの」と「他[者の実体により]空であると述べるもの」に二分する。また後者を「帰謬派」と「自立派」に二分した上で、更に後者を「経部派の如くに承認する者」と「唯心派の如くに承認する者」に二分している。この最後の区部の基準を「分位」としているけれど、周知の如く一般的には世俗諦を基準とするのが普通であり、著者が「分位」と世俗諦を如何様に理解していたか検討せねばならない。また著者自身の思想の位置付けが「他空」説の大中観である以上、著者は「他空であると述べるもの」たる「瑜伽行の中観派」に属するとするならば、他方の「自空であると述べるもの」とは誰の如何なる思想であるのかを検討せねばならない(注1 谷口参照)。

<1 2 3>【第1段落】第三 gñis/gsum pa[の項目たる]個々の差別に於いて | (4a7/b1) 見解を聞[学と]思[量]の正理により決定する[やり]方の差別と | 修習によって体験する ñams su myoñ ba[hi]見解に対する伺察[とがあるの]である | |最初に於いて | 瑜伽行の中観派と | 実体性は無いと述べる中観派の阿闍梨方がご承認になった(1/2)論書に於

いて| 經典と[密]呪の二つの[考え]方[の内]から| 最初(經典)に於いて中間の教誨 *bkaḥ bar pa[hi]* の了義を決定する[考え]方と| 最後の[教誨の]了義を決定する[考え]方[との]二[の内]から| 最初に於いて瑜伽行の中観派の[考え方]と| 反対の(2/3)[考え]方[とがある]のである| |

文頭の科文の番号が第二であると他のどの科文とも繋がらない為、番号は「第三」であるべきであり、内容的にもここからが次の科段であると判断した。さて、ここでは「個々の」宗義の「差別」を識別する基準を設定しており、最初に見解を聞[学と]思[量]の正理により決定する[やり]方の差別と「修習によって体験する見解に対する伺察」に二分し、前者を「中観派」一般が「承認」する「論書」が経証とする「經典と[密]呪の二」の内「經典」を基準として「中間の教誨の了義を決定する[考え]方」と「最後の[教誨の]了義を決定する[考え]方」に二分し、更に前者を「瑜伽行の中観派の[考え方]」と「反対の[考え]方」に二分している。

【第2段落】最初は| 中間の教誨の明確[に]説示した空性は| 遍計[所執性]は自己の実体により空である「無[いものとして]否定すべきもの *med dgag*」それそのものであるのであるうえ *la*| これは了義[たる]究境のものでないのであって| 「何故ならば」個別[的]自己による証悟の智(個別自証智) *so so rañ gis rig paḥi ye śes* の経験対象 *myoñ bya* でないのである(3/4)が故にである| その説示されるべき要点は法の界の[体性]智と言うことそれそのものであるのであって| 「それそのものはそれであるのである」と『般若[波羅]蜜多の經』*Ser phyin gyi mdo[hi]* と *hi/dan* 『解深密の經』*dGoñs pa ñes par hgreḥ baḥi mdo*(北京版 No. 774)そのものから明らかに仰せになったのである| |と説示するのであるのだ| |(4/5)

前段落の「瑜伽行の中観派の[考え方]」から見た「中間の教誨の」「空性」の内容は「遍計[所執性]は自己の実体により空である」ことであり、即ち「無[いものとして]否定すべきもの」であるので「了義[たる]究境のもの」ではないとする。その論拠として、その「空性」は個別自証智「の経験対象」ではなく、また法界体性智でもないからであるとして、経証を挙げる。

【第 3 段落】第二[たる]実体性は無いと述べる説示[の考え]方に二あって| 正理聚の[説示の[考え]方]と| 讃頌聚から生起する説示[の考え]方なのである| |『般若[波羅]蜜多の経』の説示されるべき要点は明確[に]説示したことは言葉(語) sgra がどのようなであれ[その]通りのことそれそのものであるのだけれど| それ(5/6)以外[の]空性あるいは法の界の[体性]智と言われるもの[の即ち]偉大なる聖者の個別的 so sor 自己による証悟の智の或る体験対象 ñams su myoñ bya を説示すべきことに同意しないのである| |明確に説示したことそれそのものは何かと言うならば| 遍計[所執性]と円成[実性]等(6/7)の解析[し]分析[し]了わること]phye bsal 無しに| 所知の尽所有の法は自己の実体により空である「無いものとして否定すべきもの」そのものなのである| |

ここでは第 1 段落の「反対の[考え]方」である「実体性は無いと述べる説示[の考え]方」を「正理聚の[説示の[考え]方]」と「讃頌聚」の「説示[の考え]方」に二分した上で、前者に関連する『般若[波羅]蜜多の経』が「明確[に]説示したことは言葉(語)がどのようなであれ[その]通り」に理解すべきであって「それ以外[の]空性」と法界体性智たる個別自証智の「体験対象」については何も「説示」していないとする。また「明確に説示したこと」とは「遍計[所執性]と円成[実性]等」について「解析[し]分析[し]了わること」無いままで「所知の尽所有の法は自己の実体により空であり」「無いものとして否定すべきもの」であると「説示」しているとする。また以上の記述による限り<1 2 2>の「実体性は無いと述べる中観派」は、同じ「自[己の実体により]空であると述べるもの」との関係が不明確であるにしても、第二法輪に属する論書である「正理聚」の「空性」として「自己の実体により空である」と「説示」していることとなる。

【第 4 段落】その様にそれはまた等引に於いて通達する[考え]方と| 後[に]得[るもの]に付いて承認する[やり]方[との]二[がある内]から| 最初は瑜伽行派 rNaI hbyor spyod pa pa の様に| (4b7/5a1) 空性と言われる法は瑜伽師の現前[識]による或る体験対象を言説 tha sñad としても承認することでないのであって| [何故ならば]「無いものとして否定すべきもの」は性質[と]他[を]除[外することと]から離脱し了っていない

いことにより現前[識のもの]は言うまでもなく | 無分別の識のみのものとしても rtog(1/2) med kyi śes pa tsam gyi hañ 対境 yul たり得ないが故にである | それによるならば空性を聞[学と]思[量]によって決定した意義に於いて等引の般若 mñam par bshag pañi śes rab は空[と]非空などの相を何としても把握しないのである | |

同じ第 1 段落の「反対の[考え]方」を「等引に於いて通達する[考え]方」と后得「に付いて承認する[やり]方」に二分した上で、前者として「瑜伽行派」即ち唯識派と同様に「空性」たる「法は瑜伽師の現前[識]による」「体験対象を言説としても承認」しないとす。その論拠として「無いものとして否定すべきもの」「は性質[と]他[を]除[外すること]から離脱し」ていないので「瑜伽師の現前[識]」と「無分別の識」との「対境たり得ない」からであるとする。従って「空性を聞[学と]思[量]によって決定した」「等引の般若は空[と]非空などの相を何としても把握しない」ことになるとする。

【第 5 段落】第二[たる](2/3)後[に]得[るもの]として言説を施設する[やり]方は | 等引に於いて対境の相は何も見えないことに於いて勝義が見えるのであると[言う]言説を施設したのであるのだけれど | 自己の[考え]方[たる]究境のものに於いて勝義の諦と言われる相[の]基礎(事相) mtshan gshi をも承(3/4)認しないならば | それが現前[識]に通達されることが一体何として有ろうか[いや無い] | その理由はまた | 空性と | 自性の涅槃 rañ bshin gyi myañ h̄das と | 法の界などを言葉と分別の対境と為し得ることそれ[等]一切は世俗 kun rdzob の諦[である]だけであって | (4/5) [何故ならば]詳細に伺察した軍隊 dpuñ は耐え[得]ないが故にそして | 言葉[と]分別の対境から離脱し了っていないが故にである | それ[たる]話として(所謂)また月[称] Zla ba[s] が「涅槃 mya ñan las h̄das pa はまた世俗の諦であるのかと若しも言うならば | それはその通りであって | 」と[説示し了り]そして | 智蔵 Ye śes sñiñ po[s] が | (5/6) 「それによってこれは世俗であって | | 」と[説示し了り]そして | 「生じること等を否定したことも | | 勝の義と随順する[が]故に同意する h̄doñ/h̄dod | | 」と分位に於いて二諦の建立を建立すべき時[に]勝義の諦として説示し了ったそれ等はまた差別[遍計所執性?] rnam granis pa と (6/7) 随順するもの[たる]勝義のみ[である]と説

示するけれど | 差別[遍計所執性?]でないのである勝義と言われるものは正理の聚 rigs pa^{hi} tshogs[で]注釈と具なるものから[は]説示しないのである | 最終的に mthar[は]それが通達される智をも承認しなくて | [何故ならば]如何[であれ]話として | 「勝義は知覚の行境(5a7/b1)で[は]ないのだ | 」と[説示し了り]そして | 「如何様であれ心は何かの行相を有するもの rnam pa can として変化するもの[で]その対境 | 」それが完全[に]知られる ses pa それ[がそうである]通りにそれはまた言説[に]依存し了ってから証悟されるものであるのだ | 」と[言う]法性が通達されることを施設し了ったことを説示したことによってなのである | |

后得「として言説を施設する[やり]方」即ち前段落の后得「に付いて承認する[やり]方」は「等引に於いて対境の相は何も見えないこと」が「勝義が見える」ことである「と[言う]言説を施設」することであるとする。しかし著者の「自己の[考え]方」である第 1 段落の「瑜伽行の中観派の[考え]方」の「究境のもの」として「勝義の諦と言われる相[の]基礎(事相)をも承認しない」のであるならば「勝義の諦」が「現前[識]に通達されること」も無いことになってしまうと批判する。「その理由」として「空性と | 自性の涅槃と | 法の界などを言葉と分別の対境と」することは「世俗の諦」であるからであり、その論拠は「詳細」な「伺察」に「耐え[得]」ず、また「言葉[と]分別の対境から離脱し」ていないからであるとする。更に第 1 段落の「反対の[考え]方」の三種類の教証を示した上で「分位」(段階)として「二諦の建立を建立す」る「時[に]勝義の諦として説示」するのは「差別[遍計所執性?]と随順する」「勝義のみ」であって「差別[遍計所執性?]でない」「勝義」については「正理の聚」の段階(「分位」?)からは「説示しない」とすると共に「最終的に[は]」「勝義」が「通達される智を」「承認しな」いとし、その論拠として二種類の教証を示した上で「対境」が「[そうである]通りに」「言説[に]」より「証悟される」と言う教証の如くに「法性が通達されることを施設」するからであるとする。

(以下続く)

¹⁾ 谷口富士夫『西藏仏教宗義研究[第六卷]トゥカン『一切宗義』チョナン派の

章』Studia Tibetica No. 26、(財)東洋文庫、東京、1993(平成5)年；小林守「シャーキャ・チョクデンのツォンカバ中観説批判——『書簡・梵輪』和訳——」『[仏教文化学会十周年・北條賢三博士古希記念論文集]インド学諸思想とその周延』(南)山喜房仏書林、東京、2004(平成16)年では、書名を『二流儀[の]弁別[の]注』と訳しており、参照いただきたい。

²⁾ この「大中観の二つの[やり]方」の示す内容が、表題中の「大いなる乗り物の二つの規矩」と対応しているならば、著者の思想的立場である所謂「大中観」とは唯識派と中観派を内包する、より高次元の中観思想であると標榜していることになる。

³⁾ 池田練太郎「Candrakīrti『五蘊論』における諸問題」『[駒沢大学]仏教学部論集』16、同研究室、東京、1985(昭和60)年、p. 582ではアティエーシャ Atiśa が月称の『明句論』を *Tshig don gsal ba* と記載する資料を紹介している。